

地球の大きな気象変化の歴史に、6,000~60,000年に対応するように、大変寒さの厳しいかったウルム氷期(7~1万年前)があります。ペニズワイは、おそらくこの時代に、ズワイガニより、より

寒さに堪える種として日本海で派生したと考えられます。

(ほりい なおじろう 魚津市役所)

城址公園の木 —その6— —カシの木—

太田道人

原生林という言葉聞いたことがありますか。何百年も何千年も木が切られたことがない森林のことです。

ここで一つの言葉を覚えていただきます。「遷移(せんい)」という言葉です。皆さんは、毎年のように庭の草むしりをされるとお思います。何も生えていなかったところに雑草が生えてきて、ほうっておくと草ぼうぼうになりますね。これをさらにほうっておくと、どうなるでしょう。木が生えてきて林になります。もっと時間がたつと、木の種類が入れ変わって少なくなってきた、最後には、林をつくっている大きな木は、たった1種類だけになってしまいます。こうなるまでには、何百年もの年月がかかります。この最後の林のことを極相林といいます。つまり、人の手を加えないでいると何も生えていなかったところが、草原になり、



やがては林が変わっていくことを「遷移」というのです。

さて、富山県の低い山の原生林は、ウラジログシというカシの木からできていました。葉の裏が白いカシの木です。この木は、高さが25m以上で太さが1mにもなって、1年中緑の厚い葉をつけています。そのため、林の中はうす暗くて湿度が高く、風はあまりふきません。今となっては珍しい植物がたくさん生えていました。しかし、今ではウラジログシの林は古いお宮にほんの少ししか残っていません。ほとんどが燃料用に切られてしまったからです。

城址公園には、ほかのたくさんの木にまじってウラジログシとシラカシが少し植えられています。今から、もし公園にだれも入らなくなったら………。公園は草ぼうぼうになり、いろいろな木が生えてきて、遷移がどんどん進んで、500年ばかり先にはカシの木の森になってしまうのではないかと考えられます。もちろん、今までどおり草かきをしたり、土の上で遊んだりしていれば、公園が森になってしまうようなことはありません。

(おおた みちひと 植物担当)

第4回 館蔵品展

—富山のトンボ—

期間：3月11日(火)~6月1日(日)

場所：2階特別展示室

内容：富山県のトンボ類は現在76種です。今回の展示では、当館に寄贈された、田中忠次氏および加治外司三氏の戦前の標本をふくむトンボコレクションを中心に、富山県のトンボ相の紹介をいたします。

